水色時計

透明なブドウ

透明なブドウの味がする

微熱ある時の何処かのボトル水

半ズボンに草いきれ

滑り台に風を切りすぎたか

衣替えで先週しまった厚布団を取り出す

冷たい生地に身を包み散熱

空に喘ぐ魚の絵本の話を思い出し

今いる此処のためだけの深呼吸をした

(2013/4/13)

喘鳴

その黎明に言葉は足らず
ただの一時は積み重ねられ
砂場の一粒は動いたかどうかも分からない
永遠の半月に照らされて
プラスチックの神は振り子に動き
苦しいこともあれば
苦しいときも来ると言う
深夜の叫びはリズムを生み出し
夢の震央は裂けるがままのよう
誰が止められようか
誰が汽笛を鳴らすのか
弦は果てなく描かれて
上るも下るも続くのみ
頑張れとか戦えとか言われても
何がどうしてとどうなるのかと
平行へと近づかんがためだけに立ち泳ぐ
水の無い海の果てへ
呼気はかすれゆく
声はかすれゆく
思いもまた
ひゅうひゅう漏れだして
どこだかわからない場所へ吸い上げられてゆく

(2013/2/6)

水色時計

ひとめで百円と判る腕時計を着用している
ピンクよりはましと思え水色を選んだ夕方
唐突に降り出した雨に打たれつ自転車を漕ぐ
左手を庇うことなどない四十五分の帰路

訳もなくビー玉を集めては空き瓶に貯め込む
ガラスを鳴らす子どものように
自転車の鍵、携帯、眼鏡、家の鍵、腕時計と下駄箱上に並べた
湿気に少し霞んだ液晶のコロンは点滅をやめてはいなかった

大きな古時計はどこなのかと幼子が囁く
突然消えてなくなるよりは、少しずつ少しずつと思ってしまうのは悪いことなのか
まばたきのごとき点光の雨は続いた
降り続くのも歩き続けるのも醒めやらぬのもまた夢の中の時間である

(2013/3/13)

水族所感

その水族館はおとなしい川魚の世界
薄暗く静まり返ったひとけのない空域
子供は椅子に着き珍しくもない黒い目を見る
ナマズの指揮棒やイモリの磁石に惑わされ
吸い込まれる水槽ターンの連続に首をかしげ
熱気をおびた緑の外側を忘れた

望遠の坂道の途上にある
その屋上にいた自分らを見上げるように
背中で呼吸をしながら
二日連続で自転車で漕ぎ着ける
低速ターンの土手を斜めに横切り走り
かの水族館へ通うG.W.

魚の夢をみるように
夜中に足を動かした

(2013/5/6)

新しい海に

海流なき神殿の段差に淡水はゆるく波うち

島嶼の如き土塊の向こうに板橋は見え隠れ

夕焼けのさらなる彼方には紫色の秩父山系

暖かい風と冷たい風が交互に頬を撫で回し

ウインドサーフィンやカヤックの背中を見

誠に勝手ながらも子供には此処は海と一言

自らの幼少の海と重ね合わせつつ何気なく

押しつけるでもなしに呟いてみるだけの汀

人差し指でそっと触れてみる水の色は透明

そこから始まりそこが全ての源となる俯瞰

(2013/6/1)

エイ

狭い水槽の中をエイが飛び回る
自分よりも低いはずの場所を
軽く高く舞い上がりうち震える
長い尾でバランスをとりながら
しぶきを上げて同槽の魚類をたき付ける
見上げるような白い腹の笑顔

傍らのスケッチには
シンプルな線画が何ページに渡って連なり
動画のごとく風に流れる
たまの急停止を除いて
エイはひたすら飛び続ける
全力なのか遊びなのかは不明も
乱反射は眩しさの中で変化し続ける

(2013/5/23)

外房雑感

海に近い断崖を曲がり道
単線列車は短いトンネルを幾つも潜った
低い頂に薄い霧が風ぬける山側ばかりを見ていた

すぐそこにある海を知らない
娘は狭い棚田をいちいち数えては麦茶を飲んだ
夏がまだ遠いような窓
揺れが激しく七月を急きたてた

ここはどこの細道かと
大人も海を忘れてホームへ降り立つのか

気がつけば
いちばん近いはずの海も探さずに歩いていた

(2013/7/23)

海流の町へ

某かの叫びが響き
地軸は傾きかけて止まったまま
時間は言い訳に過ぎず
流木は血管を切り裂いて
虚ろな鉄道だけが
駅名を忘れたままに走り続ける

金もない
友もない
縁もなくなり
一切の猶予もない
無用な孤独に田園地帯は架空に終わり
冷気の下層に滞空していた

誰でもない街の苦しみに
無関係な号令の前で
何も出来ずここで私は停止して
ただただ駅を数え上げる
意味をなくした祈りのごとき瞼の水流に捧ぐ

(2013/9/5)

ミルキーウェイ

腰の高さ程の低い滑り台に掌をつき

何一つ滞り無きお前をいつまでも待ち続けよう

冬の真昼のミルキーウェイに

月面ほどに静かに佇む秒針の軌跡にも決して驚きはせぬ

一つの虹が暗闇を遡上することなど永遠になくとも

ひとつひととせ　ふたつふたとせ　光年の

五億の星域を泳ぎださんお前に語るべく

溢れだす始まりと終わりの双曲に瞳を閉じ続けた

(2013/11/29)

無風地帯

湿気の低い寒空の下

鉄棒を握りしめ

無風に唇を突き出す

ボール禁止の立て看の前

サッカーをする中学生

蹴り上げられた青いゴムボールは

枯れ葉のプールを飛び越えて

今では誰も使わない

電話ボックスに命中した

あたたかい飲み物は全て売り切れの自販機で

五百缶のメロンソーダを買って飲みほした

ベンチに置き忘れられた誰かの黒いジャンパーが叫んだ

風はいつ吹くんだ

透明なまま夕方まで目を閉じていた

(2013/2/15)

後記奥付

なかなかまとまった物は書けないので、こうして日々の脈たる連ね言葉を詩集的に括ってみました。
（2014.3.23）

水色時計

http://p.booklog.jp/book/83994

著者：井上雅英
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tkmuchzw411/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/83994

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/83994

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ